



### <外部不安が収まり米国株が持ち直せば日本株も反転へ、売られ過ぎ銘柄をウォッチ>

・日米株式市場とも10月半ば以降、再び大崩れした。要因は米国の利上げ継続が再び強く意識されたことと、イスラエル・ハマス戦争勃発による地政学リスクの高まり。NYダウは3万2000ドル、日経平均株価は3万円を維持できるかの攻防。日本株下落に関して、内部要因は岸田政権の支持率低下が止まらないことくらいで、企業業績面では大きな不安がないことと、再び150円/米ドルを突破した円安効果がむしろ企業業績を押し上げる。米国ハイテク企業の業績も回復に転じており、米国利上げムードが沈静化し、中東不安が大事に至らなければ、米国株市場は反転上昇に転じることになる。そうなれば、外部要因で売られ過ぎた日本株に対する買い戻しの動きが再び強まることが予想される。しばらくは不安定な相場展開が続きそうだが、個別で売られ過ぎ銘柄をウォッチしていきたい。

### <決算発表シーズン、好悪マチマチだが、総じて日米とも業績面に大きな不安はない>

・10~11月は日本企業の2月・3月決算企業の上期(23年2~8月期・3~9月期)、米国企業の第3四半期(23年7~9月期)の決算発表シーズンである。2月決算発表企業は小売業界が中心だが、特に百貨店各社は脱コロナによる外国人観光客が急増していることで客足が戻り、業績回復が顕著になっている。この点、3月決算企業の航空2社の業績も期待され、通期見通しの上方修正もあり得そうだ。中でも、ANAホールディングスは復配を実施することが示されれば、再び株価上昇に転じることも予想される。

・3月決算企業は、出足はマチマチな印象が強い。先行して決算発表する2月決算の安川電機と3月決算のニデックは、両社とも上期としては過去最高、通期見通しも据え置いて過去最高を達成する。安川電機は中国の設備投資抑制と半導体大不況の影響懸念を払拭する堅調ぶり。ACサーボモータとインバータが回復基調、産業用ロボットの好調が続いている。ニデックは注目のEV向け駆動システム「E-Axle」が予想外に厳しく、同事業の今期黒字化の当初計画を一転、売上未達かつ開発費で赤字が継続する。株価低調だったのは、その懸念のためで、現実となり株価は一段の下落となった。しかし、米国のインフラ向け大型モータが予想外に好調かつ高収益で為替差益もあり、上期利益は会社公表とアナリストコンセンサス予想を上回った。下期の為替前提は120円/米ドル、130円/ユーロで通期見通しは会社公表が上方修正され、さらに来期は「E-Axle」の欧州子会社「NPe」を連結化することで、同事業は急拡大し確実に黒字になる公算が大きい。株価下落は売られ過ぎの感が強く、いずれ反転上昇に転じるとみている。

・一方、オムロン、トプコンが大幅下方修正で一転、大幅減益、キーエンス、信越化学の上期実績が3年ぶりの減益になるなど、中国の設備投資抑制、半導体大不況の影響が表面化している面もあり、今後、FA関連、半導体関連の業績発表は要注意。しかし、コマツ、日立は通期見通しを上方修正、自動車各社も生産回復、円安効果で業績好調が予想される。今回の業績発表は好悪マチマチだが総じて堅調で、米国企業もGAFAMが業績回復に転じており、日米とも業績面に大きな不安はないものと予想する。